

■西南戦争 140 年記念シンポジウム報告■

# 「熊本城炎上の謎に迫る！」

国内最後の内戦、西南戦争。政府軍が死守する熊本城は明治 10 年 2 月 19 日に突如炎上する

平成 29 年 11 月 5 日、熊本城炎上の原因究明のため、シンポジウムを開催しました。そこで何が語られたのか・・・



大西市長挨拶



パネルディスカッション風景



講演風景

講演いただいた方々からは、それぞれの専門分野から貴重なご意見をいただきました。

## ■ 鈴木 淳 (東京大学) 「西南戦争の舞台熊本城」

籠城中の天守が砲撃されたり、占領後追い詰められたたりした後に炎上することを考えれば、熊本鎮台にとって最も合理的な選択は、これらの建物を自焼することだった。

## ■ 佐藤 理恵 (熊本城調査研究センター) 「電信資料からみた熊本城炎上」

天守炎上に関する電信の第一報は、「本日十一時、鎮台自焼セリ」だが、その後の電信では、出火原因が不明となっている。

## ■ 齋藤 達志 (陸上自衛隊幹部学校) 「軍事戦略からみた熊本城炎上」

城中の守兵を死地に追い込み、鎮台の人心を一つにするため、谷干城司令長官が籠城戦準備の最終段階として自焼を決行した。

■ 中原 幹彦 (熊本博物館) パネルディスカッションにて  
自焼を隠蔽しなければならなかった背景こそが「謎」であり、今後はその究明が課題となる。

## ■ 富田 紘一 (熊本城顕彰会) 「鎮台の記録からみた熊本城炎上」

出火当時、その場に居合わせた児玉源太郎の回顧談『熊本城籠城談』には、事実と異なる点があり、これは自焼を隠蔽するための意図によるものと考えられる。

## ■ 美濃口 雅朗 (熊本市文化振興課) 「出土品からみた熊本城炎上」

被熱の顕著な出土品の多い小広間三階櫓付近には、鎮台司令部があったとみられ、児玉源太郎が隠密裏に自焼作戦を実施する格好の場所だった。

## ■ 鶴嶋 俊彦 (熊本城調査研究センター) パネルディスカッションにて

「天守の床下に放火した」という村上猪源太の供述がある。小天守地下と大天守 1 階をつなぐ石階段を上スペースならば、床下に火を付けるのは可能。